学　位　論　文　要　旨

大規模林業地帯の山林管理と地域社会組織に関する研究
――山世話に着目して――
A study on forest management and community organizations in a large-scale forestry region --A case of *Yamazewa (forest managers)*--

農林共生社会科学専攻　農林共生社会科学大講座
林田　朋幸

本研究では、山村社会の社会経済構造を捉えるために、林業経営と地域社会組織の連関について解明することを課題とした。特に、大規模林家及び山守層（山世話）を中心とした社会関係を考察した。さらに、村落を越えた山林の所有や管理の展開に着目して考察を行った。山守層とは、山林地主から委託された山林管理者を指す。本研究の調査対象地域である大規模林業地帯の三重県松阪市波瀬地区には、山世話と呼ばれる山林管理者が村落単位で存在してきた。

現在、過疎高齢化やＩターン者の増加を背景に、山村への注目が高まっている。そうした状況下で、村落を中心とした従来の地域資源管理の単位を、流域等のより広域的なネットワークを視野に収めた研究がなされている。農山村や中山間地域という用語が用いられる際、平場農村における生産力や社会関係の在り方が連想されがちであった。実際には、平場農村と山村では生産力に大きな違いが存在する。また、戦後に山林解放が行われなかったため、山村は農村に比べ社会関係の固定性・安定性が見られるとされてきた。これまで大規模林業地帯に関しては主に林業経営に着目した研究が行われてきたが、経営的な社会関係だけでなく様々な生活の場面における相互扶助が、林業経営を支える側面も無視できない。本研究では、山村特有の社会経済構造を明らかにするため、山世話に着目して大規模林業地帯の山林管理と地域社会組織の連関を考察した。

第１章では、大規模林業地帯である三重県松阪市波瀬地区山世話による山林管理がどのように展開したかを考察した。1899 年（明治 32 年）に部落有林野統一事業が進められたことを契機として成立した波瀬村有林の歩口山制度は、長期にわたって波瀬村の重要な財源となる歩口金をもたらした。本章では、歩

口山制度による波瀬村財政の安定化と不在地主の山林管理のために、山世話制度が不可欠であったことを示した。2000年代に入ると、林業不況の長期化や労働力不足によって、大規模林家や不在地主の林業経営に大きな転換（町外出身者の雇用や森林組合への管理委託）が起きたことを示した。その上で、明治時代から村落を越えた山林所有が行われ戦後に村有林が私有林となり定着したため、山世話による山林管理が長年にわたり行われてきたことを明らかにした。

第2章では、波瀬地区で山林管理・地域社会内外の結節点として山世話が果たしてきた役割を明らかにした。まず山世話の役割に着目する背景として、林業経営論やコモンズ論などの先行研究の整理を行った。2013年4月から2015年6月までの波瀬地区の山世話・山林地主への調査事例を元に、山世話による山林管理体制を分析した。山世話と不在地主の信頼関係が、熟練技術による長期間の山林管理や、契約関係を越えた関係により結ばれることで、広域的なネットワークに及ぶ地域資源管理が行われてきたことを明らかにした。

第3章では、林業経営・林業労働組織が変容する中で賃金体系において月給制が貫徹せずに、出来高制が残存していることについて考察を行った。長年にわたる出来高制の維持は、経営者であるT社と山林労務者の双方の間で、不可欠なものとして肯定的に捉えられてきたためであることを示した。経営者としては、出来高制の維持は労働力の確保と山林管理の維持を実現する上で不可欠であった。山林労務者側も、出来高制により家の活動や村落活動や副業・趣味に関する活動を必要に応じて実現してきた。出来高制を通して、大規模林家が熟練の山林労務者を確保し、山林管理を長年維持してきたことを明らかにした。

第4章では、1981年に設立され現在も存続している松阪市波瀬地区の波瀬むらづくり協議会を事例に、広域的な住民自治組織の機能と担い手について考察した。全国の農山村地域で集落再生等を目的として、広域的な住民自治組織の設立が2000年以降特に進められている。広域的な住民自治組織の機能として、従来の住民自治組織との住み分けや生活環境整備の補完を行っていることを明らかにした。また、担い手については、発足当初から長年にわたり会長であった大規模林家T氏から、2003年に素材生産業者K氏へと会長の交代があり、Iターン者や女性等の新たな担い手が波瀬地区の自治活動に参加するようになった過程を明らかにした。さらに、新たな担い手の参加により、大規模林家―山世話・自営林家―山林労務者の林業ネットワークに基づく地域運営が補完されたことを示唆した。

終章では、議論を総括し、大規模林業地帯において、大規模林家―山守層・自営林家―山林労務者のつながりによって形成された、広域的な地域社会の展開を把握した。広域的な住民自治組織と従来の住民自治組織をつなぐ存在として山世話が重要な役割を果たしてきたことを明らかにした。そして、大規模林業地帯に特有な社会関係に基づいた山村社会の自治や地域資源管理に着目することの、現代的意義を示唆した。